

ラワン語マトワン方言における情報構造と名詞述語文調査結果

大西 秀幸

1. はじめに

本稿はラワン語マトワン方言における情報構造と名詞述語文に関する調査結果を示すとともにマトワン方言の情報構造とコピュラ文と名詞述語文に関する基礎的な記述を行うことを目的とする。

本稿の構成は次の通りである。予備知識として、0では対象言語の概要、0では言語学的特徴、0では一次資料の概要について示す。0では特に本稿の内容に関する文法項目として「ラワン語の文」と「文末小辞」について概略する。0では表記上の注意について何点か触れておく。0では調査例文を調査協力者に訳してもらった結果を示す。0ではいくつかの調査項目について考察を行い、今後の課題をまとめる。

特に断りのない限り、本稿で示す例文、グロス、日本語訳、外国語文献の翻訳は筆者による。

1.1. ラワン語と対象方言について

ラワン語はミャンマー連邦共和国カチン州の北部に主に居住しているラワン人によって話されている言語である。Ethnologue¹によると、ラワン語話者の人口は全体で 63,000 人であり、うちミャンマー連邦に居住する人口は 62,000 人であるとしている。系統的にはチベット＝ビルマ系言語 (Tibeto-Burman)、中央チベット＝ビルマ語支 (Central Tibeto-Burman) のうちヌン語群 (Nungish) に属する²。

Morse (1988) によるとラワン語はマトワン (Matwang)、ルンミ (Longmi)、タンサル (Tangsar)、キンパン (Kwinpang)、ダル (Daru) の 5 つの方言に大別することができる。本稿で対象とする方言は、カチン州のプータオ (Putao) 市周辺で話されているマトワン方言である。以下特に断りが無い限り、ラワン語とはマトワン方言を指す。

¹ <http://www.ethnologue.com/language/raw> (最終閲覧日 2015/10/23)

² ヌン語群に属する言語としては、中国雲南省で話される独龍語 (Drung) と中国の雲南省福貢県からミャンマーのカチン州にかけて話されるアノン語 (Anong) が知られている。独龍語については多・孫 (2009) に、アノン語については Sun & Liu (2009) に詳しい記述がある。ラワン語 (マトワン方言) に関しては、Morse (1965) や LaPolla (2000) に文法記述がある。

1.2. 文法特徴

ラワン語には大まかに (1) に示すような文法特徴が認められる。

(1) ラワン語の文法特徴

- 音節構造：(C₀)C₁(C₂)V(C₃)/T
- 音素：/p, b, t, d, ts, dz, tɕ, dz, k, g, ʔ, φ*, β*, s, ɛ, h, m, n, ŋ, w, r, l, j, i, u, e, ə, o, a/*を付した子音は外来語にしか現れない音
- 基本語順：SOV
- 語類：名詞類 (名詞 (普通名詞, 指示詞, 代名詞), 数詞), 動詞類 (自 / 他動詞), 副詞類, 小辞類 (格小辞, 文末小辞など)
- 名詞句構造：[(指示詞=名詞)/(数詞=類別詞)] (=格小辞)
- 動詞句構造：[否定辞=使役化-<動詞, 人称, 数>³=助動詞-TAM]

動詞には、否定や TAM などの情報が接辞として付加され、動詞複合体 (verb complex) ともいえるかたまりを形成しうる。

1.3. 一次資料について

本稿でラワン語の例として挙げているものは特に断りのない限り、今回の調査に協力していただいたマトワン方言話者の発話である⁴。調査協力者のデータは (2) に示す通りである。

(2) 調査協力者のデータ

名前： ダクムフォン氏 (Dakhum Phon)⁵
性別： 男
生年： 1969年
出身地： プータオ市

調査は事前に用意した日本語調査例文⁶を協力者にラワン語訳してもらった。協力者は20年以上日本に住んでおり、日本語に堪能であるため、調査はすべて日本語を媒介にして行った。協力者が発話場面を想像しにくい例文に関しては、こちらで場面を設定し、

³ <...>は屈折要素を表す。

⁴ もちろん、解釈等を含め、表記やグロス、日本語訳に関してはすべて筆者の責任で行っており、本稿で挙げる例文についても筆者が責任を負っている。

⁵ 以下、協力者と表記する。

⁶ 協力者が訳しやすいよう、人名をラワン人名に事前に変えている。

それを説明しながら、協力者に場面を想像してもらった。その際にどのようなやり取りがあったかにも関わらず、本稿のできる限り、詳細に示したつもりである。

1.4. 本稿の内容に関係するラワン語の文法

上述の類型論的特徴に加えて、本稿の内容に関連する文法事項についてここで説明する。

1.4.1. ラワン語の文

ラワン語における文の唯一の必須要素は**述語**で、普通は文の最後に現れる。述語は動詞と述語標識小辞からなる**動詞述語**と、それ以外（主に名詞）からなる**非動詞述語**とがある。動詞述語が構成する文を**動詞述語文**、非動詞述語が構成する文を**非動詞述語文**と呼ぶ。

● 動詞文

動詞文の述語は「動詞+述語標識小辞」という構造を持つ。述語標識小辞は述語であることを示すと同時にテンスや動詞の自他をも示す。述語標識小辞には (3) に挙げる形式がある。

(3) 述語標識小辞

1. 形式	2. 機能	3. 本文中でのグロス
=ē	● 非過去の文であることを示す。	NPT
=ì	● 過去の文で、 述語動詞が自動詞 であることを表す	INTRPT
=à	● 過去の文で、 述語動詞が他動詞 であることを表す。	TRPT

非過去の文を (4) に、過去の自動詞文を (5) に、過去の他動詞文を (6) に挙げる。

(4) dzòntsè ədzēr =ē.

学生 走る=NPT

「学生が走る。」

(5) dzòntsè ədzēr =ì.

学生 走る=INTR.PT

「学生が走った。」

- (6) jā=pè=í ni?gūŋ=lòŋ zàm=à.
 この=CL (MAN)=ERG 尻尾=CL (GENERAL) 捕まえる =TR.PT
 「この男は尻尾を捕まえた。」

● 非動詞文

非動詞文とは動詞以外の要素が述語になる文である。非動詞文のほとんどは名詞述語文である。名詞述語文は、“N₁+N₂”「N₁は N₂だ。」のように名詞を並べることでつくることができる。(7)のように N₁に主題化小辞がつくのが普通である。

- (7) àŋ=nū dzòntsè.
 3SG=TOP 学生
 「彼は学生(だ).」

● 名詞述語文とコピュラ文の違い

ラワン語にはコピュラ動詞述語からなるコピュラ文がある。(8)に実例を挙げる。

- (8) àŋ=nū dzòntsè í=ē.
 3SG=TOP 学生 COP=NPT
 「彼は学生だ。」

名詞述語文とコピュラ文は「N₁は N₂だ」という意味を表せる点では共通しているものの、いくつかの点で違いが確認できる。例えば、名詞述語文には動詞接辞をつけることができないので、TAMなどの情報を文に付与することができない。(7')と(8')に実例を挙げる。

(7') 名詞述語文

- *àŋ=nū mə-dzòntsè.
 3SG=TOP NEG-学生
 (「意図した意味： 彼は学生ではない。」)

(8') コピュラ文

- àŋ=nū zòntsè mə-í=ē.
 3SG=TOP 学生 NEG-COP=NPT
 「彼は学生ではない。」

また、今回の調査を通してイベントタイプによって、名詞述語文とコピュラ文の両方が

使える場面と、名詞述語文しか使えない場面があることが分かった。詳しくは[16]と[17]を参照されたい。

1.4.2. 文末小辞

文末小辞 (SFP) は文末に現れ、主に話し手の発話内容に対する態度を表す。文末小辞のあとに、文末小辞以外の要素現れることは基本的にない⁷。(9) に実例を挙げる。

- (9) nà sānī hōl-ŋ=ó.
 1SG 昨日 着く-1SG=SFP
 「私は昨日着いたよ。」

諾否疑問文は文末小辞を使って表される。(10) に実例を挙げる。

- (10) nā=í àŋ=səŋ è-zī=mā?
 2SG=ERG 3SG=ACC N1-与える=Q
 「あなたは (それを) 彼に与えるの？」

1.5. 表記上の注意

● グロスはなるべく各要素の意味や機能が分かりやすくなるように付したが、当該の文における意味機能を一義的に示すのが難しいと判断した場合は、SFP や INTJ など統語的特徴に基づくグロスを付して、例文の後の説明で補足するようにしている。

● 1つの形式に機能が2つ以上認められる場合は、グロス欄で__。(ピリオド) で区切って表記している。

例) COP.NEG コピュラ且つ否定を表す

● 類別小辞に関しては対応する指示物によって、形式が変わるため、グロスは CL (類別小辞の種類) といった形で付している。

例) CL (MAN) 男に対応する類別詞であることを表す
 CL (BOOK) 本に対応する類別詞であることを表す

⁷ 2つ以上の文末小辞が文末に共起することもある。

● 方向接辞は移動がどの方向に向けて行われたかを表す接辞である。本稿で挙げた例文内では、地点に近づく移動（接続）と、離れる移動（離接）の接辞を用いている。それぞれ以下のようにグロスを付す。

例) DIR (CONJ) 接続の移動を表す

DIR (DISJ) 離接の移動を表す

● そのほか本稿で用いる略号については稿末の略号一覧を参照されたい。

2. 例文のラワン語訳

調査例文のラワン語訳を挙げ、説明をその下に挙げる。例文番号は調査例文の番号と対応させている。

2.1. 【対比焦点（主語）】

[1] səŋdón dī-daʔ=i=má?

PN 行く-DIR (CONJ)=INTR.PT=Q

「サンドンが行ったのか？」

mūí sínwál dī-daʔ=i.

COP.NEG PN 行く-DIR (CONJ)=INTR.PT

「サンドンが行ったんじゃない、シンワルが行ったんだ。」

主語の焦点化を明示する標識は現れない。質問に対する打消しの応答にはコピュラ文が用いられる。この場合、否定コピュラの *mūí* のみで答えるのが普通のようなものである⁸。コピュラの補語として、「サンドンが行ったの」を前につけても間違いではないが、協力者はくどい印象を受けるという。

2.2. 【WH焦点（主語）・WH応答焦点（主語）】

[2] kāgú dī-daʔ=i=lè?

誰 行く-DIR (CONJ)=INTR.PT=SFP

「誰が行ったの？」

⁸ この点で否定の否定コピュラの *mūí* は打消しの返答に用いる形式と考えてもよさそうである。

səŋdón dī-daʔ=i.
 PN 行く-DIR (CONJ)=INTR.PT
 「サンドンが行ったんだよ。」

WH焦点とWH応答焦点となる要素の焦点化を明示する標識は現れない。この文では調査協力者に発話場面の説明を求められたため、「(毎年行われる祭りのために村から一人代表を送ることになっているのだが、今年は誰が行ったの?)」「サンドンが行ったんだよ。」という場面を設定して訳してもらった。

文末小辞の=leは上の立場のものから下の立場の者へ言い下すような少し高圧的な心情を表している。

協力者によるとこの場面での応答文は「行ったのは、サンドンだよ。」のような分裂文のほうがより自然に感じるということであった。

2.3. 【YesNo 疑問・形容詞述語応答焦点】

[3] səŋdón=wāpè=nū té tē=pè mūi=má?
 PN=～のほう =TOP さらに 大きい=CL (MAN) COP.NEG =Q
 「サンドンの方が大きいんじゃないの?」
 mūi, sínwál=wāpè té tē=ē.
 COP.NEG PN=～のほう さらに 大きい=NPT
 「いや、サンドンじゃなくて、シンワルの方が大きいんだよ。」

疑問文の方は「サンドンのほうが大きい人なんじゃないの?」という意識がなされた。応答文の方では、否定コピュラを使って前の内容を打ち消している。[1]と同様に、応答に現れる否定コピュラに補語を付け加えて、「サンドンの方が大きい男だというのは違う。」のように言っても間違いとはならないものの、くどいという印象を与えるようである。

2.4. 【文焦点 (自動詞文)】

[4] pà bən=ē? 何 起こる=NPT
 [電話で] 「どうした(の)?」
 á əkət mənóm=pè tuʔ-daʔ=i.
 INTJ 今 客=CL (MAN) 着く-DIR (CONJ)=INTR.PT
 「うん、今、お客さんが来たんだ。」

電話越しに音が聞こえて、電話の向こうで何が起きているのかを聞くという場面を想定してもらった。文全体が焦点になっている文であるが、この場合も焦点化されていることを明示するような形式は現れない。

2.5. 【対比焦点（目的語）】

- [5] wē=pè còmǎré=í sàṅdóng=sàṅ ǎdùr-bú=à.
 その=CL (MAN) 子ども=ERG PN=ACC 殴る -PFV=TR.PT
 wā=ē=lè.
 言う=NPT=SFP
 「あの子どもがサンドンを叩いたんだって!」
 sàṅdóng=sàṅ mǎí, sínwál=sàṅ ǎdùr-bú=à.
 PN=ACC COP.NEG PN=ACC 殴る -PFV=TR.PT
 「いや、サンドンじゃなくて、シンワルを叩いたんだよ。」

目的語の焦点化を明示する標識は現れない。そして質問に対する打消しの応答にはコピー文が用いられる。

2.6. 【対比焦点（目的語、特に「どっち」という対比的な疑問語の場合）】

- [6] mǎcè=wē dǎṅgóng=nèṅ mǎcúṅ=wē dǎṅgóng ǎl=ē=ló.
 赤い=CNMLZ 袋=COMN 青い=CNMLZ 袋 存在する=NPT=SFP
 kālòṅ è-wǎn-ò=ni?
 どっち N1-買う -TR.NPT=Q
 「赤い袋と青い袋があるけど、どっちを買う（の）？」
 mǎcúṅ=wē dǎṅgóng wǎn=lǎmla?í.
 青い=CNMLZ 袋 買う=INT
 「(私は) 青い袋を買うよ。」

対比的な疑問語であっても、焦点化していることを明示化する標識は現れない。なお「買う」の目的語にあたる「袋」は無生物であるので、対格では示されない⁹。

⁹ いわゆる differential object marking (DOM) (Bossong 1985 他)の特徴を見せている。

2.7. 【述語焦点】

- [7] səŋdón=nū pà bən=ē?
 PN=TOP 何 起こる=NP
 「サンドンはどうした？」
- səŋdón=nū gəə̀ə̀ŋ=kə̀ní bóŋ-dár=i.
 PN=TOP 朝=ABL 出かける-PFV=INTR.PT
 「サンドンは朝からどっかへでかけたよ。」

サンドンが家にいなくて、サンドンの身を案じているような場面を想定してもらった。この場合も焦点化されていることがわかるような標識はつかない。そして疑問文と応答文において焦点化されていない（つまり前提部にあたる）要素には主題化の小辞がつく。

2.8. 【WH焦点（目的語）・WH応答焦点（目的語）】

- [8] kágú=səŋ ə̀dùr-dár=à=ó?
 誰=ACC 殴る-PFV=TR.PT=SFP
 「誰を叩いたの？」
- ədè nə̀msə̀mpè=səŋ ə̀dùr-dár=à.
 自分 弟=ACC 殴る-PFV=TR.PT
 「自分の弟を叩いたんだ。」

疑問焦点が目的語にある場合も、焦点化を明示するような要素は現れない。

2.9. 【文焦点（他動詞文）】

- [9] pà bən=ē?
 何 起こる=NP
 「何があったの？」
- səŋdón=i ə̀dè nə̀msə̀mpè=səŋ ə̀dùr-dár=à.
 PN=ERG 自分 弟=ACC 殴る-PFV=TR.PT
 「サンドンは自分の弟を叩いたんだ。」

文焦点の例だが、やはり焦点化を明示する要素は現れない。一方で主題化小辞に着目すると、応答文のどの要素にも、主題化小辞をつけることはできない。

2.10. 【目的語主題化, 主題 (目的語) の継続性 いわゆる pro-drop 言語の可能性】

- [10] wē=lòŋ mok=nū kāsàŋ=í ám=à=ó?
 その=CL (GENERAL) ケーキ=TOP 誰=ERG 食べる=TR.PT=SFP
 「あのケーキ, どうした?」
 sàŋdóŋ=í ám-bú=à.
 PN=ERG 食べる-PFV=TR.PT
 「サンドンが食べちゃったよ.」

日本語例文に倣い「(昨日作っておいた) あのケーキはどうなった?」という場面を設定したが、「ケーキはどうなった?」が訳しづらいようだったので、「ケーキは誰が食べた?」という文を作ってもらった, 目的語が主題化される場合, SOV という基本語順が崩れ, 目的語が文の先頭に来る.

応答文において, 動作が「すでに~てしまった.」局面にあること, あるいは「(本当はよくないのについ) ~てしまった」という話し手の心情が完了の接辞-búによって表されている.

2.11. 【分裂文】

- [11] ñà=í sōngānī sēŋjǎŋ=kèní wǎn-daʔ-ŋ=à=wē=nū
 1SG=ERG 昨日 店=ABL 買う-DIR (CONJ) -1SG=TR.PT=CNMLZ=TOP
 jā=lòŋ kārū=bok í=ē.
 この=CL (GENERAL) 本=CL (BOOK) COP=NPT
 「私が昨日お店から買って来たのはこの本だ.」

分裂文は節名詞化子によって名詞化された節に主題の小辞をつけて作る。「私が昨日お店から買って来たのはこの本」のような名詞述語文で言い換えることはできない.

2.12. 【措定文 主題(名詞述語文の主語)の継続性 いわゆる pro-drop 言語の可能性】

- [12] wē=gú=nū sārā í=ē. jā=zòŋ jǎŋ
 その=CL (PERSON)=TOP 先生 COP=NPT この=学校 ところ
 dǎzaʔ-ei=wē əcəm=núŋ í-bú=ē.
 働く-REFL=CNMLZ 三=CL (YEAR) COP-PFV=NPT.

「あの人は先生だ。この学校でもう3年働いている。」

2文目の主語は、省略されているが、1文目の主語と同じである。つまり主題の継続性が確認できる。

2.13. 【倒置指定文】

- [13] ànpè=nū kū=gú í=ē.
 父=TOP あの=CL (PERSON) COP=NPT
 「彼のお父さんは、あの人だ。」

コピュラ文で言うことができる。主題化小辞がついた名詞句が先頭に現れる。

2.14. 【指定文】

- [14] kū=gú=nū ànpè í=ē.
 あの=CL (PERSON)=TOP 父 COP=NPT
 「あの人が彼のお父さんだ。」

「彼のお父さんは誰ですか？」という疑問文に対する答えではなく、彼のお父さんを紹介する中での文脈を想定して発話してもらった。倒置指定文の例と同じく主題化小辞がついた名詞句が文頭に現れる。

2.15. 【定義文】

- [15] mēpāŋnī wā=wē=nū nəpnī dāŋ=i=wē
 明後日 言う=CNMLZ=TOP 明日 終わる=INTRPT=CNMLZ
 mēpāŋ ənī=səŋ wā=ē.
 後 日=ACC 言う=NPT
 「あさってっていうのはね、あしたの次の日のことだよ。」

直訳すると「明後日というのは、明日が終わった次の日をいう。」となる。[15]の文をコピュラ文や名詞述語文で言い換えることはできない。主題化小辞のついた要素が定義される対象である。

2.16. 【ウナギ文】

[16a] ηà=nū kōφī.
 1SG=TOP コーヒー
 「私はコーヒー。」

[16b] ηà=nū kōφī eùη=ē / aʔ-lám̥laʔi.
 1SG=TOP コーヒー 好む=NPT / 飲む-INT
 「私はコーヒーが好きだ／を飲む。」

いわゆるウナギ文は、[16a] のような名詞述語文コピュラ文で言うことができない。この文をもしコピュラ文で言い換えると「私はコーヒーと同一あるいは同質のものだ。」という解釈になる。」[16b] のように「私はコーヒーを飲みたい」「私はコーヒーがいい」のような言い方も可能である。

2.17. 【逆行ウナギ文】

[17] kōφī=nū ηà ùη=ē=ló.
 コーヒー=TOP 1SG COP.1=NPT=SFP
 「コーヒーは私だ。」

一方、逆行ウナギ文ではコピュラ文が使える。協力者によると、「コーヒー（を飲むのは）私だ。」という完全文が想起できるからだという。では [16] のようなウナギ文で「私（が飲みたいの）はコーヒーだ」のような完全文が想起できるかという質問に対しては、協力者は「できない」ということであった¹⁰。

2.18. 【形容詞述語文 修飾・並列・述語】

[18] wē=lòη àηeór í=nù tət=wē
 その=CL (GENERAL) 新しい COP=SEQ 厚い=CNMLZ
 kàrū=bok=nū epú=ē.
 本=CL (BOOK)=TOP 高い=NPT
 「その新しくて厚い本は（値段が）高い。」

¹⁰ なぜできないかということについてはさらなる調査が必要であると考えている。

〔形容詞〕¹¹述語は、「(値段が)高い」を表す動詞で表現される。並列は、継起の接続小辞を使って、動詞文と同様に行われる¹²。

2.19. 【意外性 (mirativity)】

- [19] á dzāmdwī bē-dár=i=é
 INTJ 砂糖 無くなる-RPT=INTR.PT=SFP
 [砂糖の入れ物を開けて] 「あっ、砂糖が無くなっているよ！」

砂糖がなくなっていることに対して意外であるという話し手の心の動きは文末小辞の =é.によって表されている。

2.20. 【思い出し】

- [20] dūrùm, ti?gúgú=nəŋ əhūm=lóm í=wē, kāgú
 午後 誰か=COM 会う=PURP COP=CNMLZ 誰
 í-ám=i=é,
 COP-PFV=INTR.PT=SFP
 əkət=wā dədōm-dár-ŋ=à. səŋdōŋ í-dar=i.
 今=~だけ 思い出す-RPT-1SG=TR.PT PN COP-RPT=INTR.PT
 「午後、誰かに会うはずだったなあ。誰だったっけ。あっ、そうだ！サンドンだったな。」

「会うはずだった (が思い出せない)」という話し手の心の動きが、1文目の末にある節名詞化子によって表されている。このように節名詞化子で終わる一種の名詞述語文は、ラワン語に散見される。

このような構文は、話し手の事象に対する確信度の高さを表している。思い出したことを発話する場合、過去の表現が用いられる。そのとき、述語標識小辞の過去と、近過去を表す接辞が必ず組み合わされて現れる。

¹¹ いわゆる形容詞的な意味を表出する語の類という意味で〔形容詞〕ということばを便宜上使っている。脚注 12でも触れたようにラワン語において〔形容詞〕を独立した語類として見なせる根拠はない。

¹² これらのことはラワン語で「形容詞」という形態統語的な振る舞いにおいて独立した語類をラワン語でたてる必要がないという根拠の一つになる。

3. 考察

3.1. 焦点に関して

ラワン語はある要素に情報の焦点があることを積極的に標示する形式はない。

反対に前提となる情報であることを標示する主題標示が、焦点化されている要素には必ずつかないということが、焦点化されていないことの傍証になり得る(しかし、もちろん前提となっていないことと焦点化されていないことは同一視できないため、主題標示がなされないことが焦点化を標示しているとはいえない)。

今後の課題でも触れるが、言語によっては明示的な形式を持たない、あるいはイントネーションによってのみ区別される(特に焦点な)、というケースについては十分な考察ができなかったため、基本的な記述にとどまることになった。

3.2. コピュラ文に関して

西山(2003)の分類を援用すると、ラワン語のコピュラ文は【措定文】、【倒置指定文】、【指定文】に用いることができることが分かる。

一方で【定義文】だけは、コピュラ文を使うことができない。主題(名詞述語文の主語)の継続性、いわゆる *pro-drop* 言語の可能性の観点からみると、[12]の文を見るとわかるように、主題は文境界を越えて継続することができる。この点でラワン語は *pro-drop* 言語の特徴を有すると言える。

3.3. ウナギ文に関して

ウナギ文と逆行ウナギ文の両方を作ることができる。しかし、ウナギ文は名詞述語文で、逆行ウナギ文はコピュラ文で現れるという点からわかるように、名詞述語文とコピュラ文には使い分けがある。時崎(2002)による英語のウナギ文に関する指摘の観点からみると、[16]と[17]の例文から見るにラワン語でも補語が定であればウナギ文で言うことができるということはある。

しかし、補語の定不定に関して、詳しく調査をしていないため、「ウナギ文」で表現できるということが「補語が定であること」によるのか同課については、今後さらに詳しい調査を行っていく必要があるといえる。

3.4. 形容詞的意味の語に関して

名詞述語文とコピュラ文の両方が存在するラワン語において外心構造をつくる機能をもつと考えられる形式は、コピュラではなく主題化小辞(トピックマーカ)である。ラワン語では、[形容詞]が名詞に後続し、内心構造を作る。たとえば[18]における、

[18'] kārū=bok=nū əpú=ē.
 本=CL (BOOK)=TOP 高い=NPT
 「本は高い。」

という文は、過去の文にすると、

[18''] kārū=bok=nū əpú.
 本=CL (BOOK)=TOP 高い
 「本は高かった。」

となる。さらにこの文を内心構造にしようとする、

[18'''] kārū=bok əpú.
 本=CL (BOOK) 高い
 「高い本。」

となる。[18'']と[18''']の違いは主題化小辞があるか否かということだけである。つまり外心構造か内心構造かを区別するために、主題化小辞が機能していると考えられる。

3.5. 意外性に関して

起こった事象が話し手にとってどのような心の動きであったかは文末小辞によって表現される。[19]では、「あると思っていた(予想外にも)砂糖がない」という驚きが文末小辞=éによって表されている。

特に「意外性」や「思いだし」に関しては、文末小辞のみならず、テンス形式が大きな役割を果たすことがわかる。「砂糖がない」や「サンドンであることを思い出した」のは発話時点のはずなので、現在のテンス形式が用いられそうだが、既存の知識(あるいは予測)に反することを認識したときには必ず過去の述語標識小辞が用いられる。

3.6. 今後の課題

今回の調査は時間の限られた中での調査であったため、全体的にそれほど考察が深まらなかったということが最大の課題である。

以下に挙げる個別の課題を設定し、何回か調査をしていくつもりである。第一に、明示的な形式を持たない、アクセントや、音調などによる焦点化標示については、ほとんど調べることができなかった。

今後は、焦点化された要素に特殊な音象徴が付加されるか否かという観点から、焦点化されない場合と対照させながら、考察していく必要がある。

略号一覧

1	話し手人称	
2	聞き手人称	
3	第三者人称	
-	接辞境界	
=	接語境界	
.	文境界（ラワン語例文欄）	
/	グロスを複数つけるときの境界（グロス欄）	
?	疑問文境界	
,	文以外でポーズが置かれる境界	
*	話者によって不適格と判断された文	
ABL	ablative	起格
ACC	accusative	対格
CL	classifier	類別詞
CNMLZ	clausal-nominalizer	節名詞化子
COM	commutative	共格
CONJ	conjunctive	接続（ある地点へ向かう移動）
COP	copula	コピュラ
DIR	direction	方向
DISJ	disjunction	離接（ある地点から離れる移動）
ERG	ergative	能格
INT	intention	意図
INTJ	interjection	間投詞
INTR	intransitive	自動詞
N1	non-1st.person	一人称以外
NEG	negative	否定
NPT	non-past	非過去
PFV	perfective	完了
PN	proper noun	固有名詞
PT	past	過去
PURP	purpose	目的

Q	question	疑問
REFL	reflexive	再帰
RPT	recent past	近過去
SFP	sentence final particle	文小辞
SG	singular	単数
TOP	topic	主題
TR	transitive	他動詞

参考文献

- Bossong, Georg. 1985. *Empirische Universalienforschung. Differentielle Objektmarkierung in der neuirischen Sprachen*. Tübingen: Narr.
- 多吉, 孙宏开 (2009) 『独龙语的基本特点和方言土语概况』北京: 民族出版社.
- LaPolla, Randy J. (2000) Valency-changing derivations in Dulong-Rawang. *Changing valency: Case studies in transitivity*, ed. by R. M. W. Dixon & Alexandra Y. Aikhenvaid, 282-311. Cambridge: Cambridge University Press.
- Morse, Robert H. (1965) 'Syntactic frames for the Rvwang (Rawang) verb.' *Lingua* 15:338-369.
- Morse, Stephan A. (1989) Five Rawang dialects compared plus more. In D. Bradley, E. J. A. Henderson, and M. Mazaudon (eds.), *Prosodic analysis and Asian linguistics: To honour R K Sprigg*, pp. 237-250. *Pacific Linguistics C-104*. Canberra: Australia National University.
- 西山佑司 (2002) 「自然言語の二つの基本構文...コンピュータ文と存在文の意味をめぐって」『西洋精神史における言語観の諸相』 45-69.
- Sun, H., Liu, G, Li, F., Thurgood, E., & Thurgood, G (2009) *A grammar of Anong: Language death under intense contact*. Leiden: Brill.
- 時崎久夫 (2002) 「日英語のうなぎ文」『日本語学会第124回大会(2002年6月15, 16日, 東京外国語大学)予稿集』 84-89.

